

## 紫の上再論

— その「世(の中)」認識をめぐって —

武原弘

「若菜」下巻初頭近くに、「はかなくて、年月も重なりて、内(裏)の帝、御位につかせ給ひて、十八年にならせ給ひぬ」(三一326)という短かい叙述で四年間の経過が語られている。物語における四年間の空白が、作者のいかなる意図と方法によるものなのかという問題もあるが、続く物語本文は、唐突に、冷泉帝の讓位のことを語り、さらには紫の上の出家志願のことを語る。

「今は、かう、おほぞうの住ひならで、のどやかに行ひをもとなん思ふ。この世は、かばかりと、見果てつる心ちする齡にも、なりにけり。さりぬべきさまに、おぼし許してよ」(三一328)さきの、四年間の経過を含む速い歲月の流れが重くかかっている紫の上のことばではあるが、「この世は、かばかりと、見果てつる齡」には、現世の喜怒哀楽、人生の表裏を経験しつくしてのち、世を無常と悟った彼女の深い感慨がこめられているかのごとくである。紫の上に対する源氏自身にも、出家の志はやくからあった。「みづから、深き本意のあること」(同)だったのであるが、当の紫の上に対す

る愛執の故にそれを思いどまってきたのである。

十月、源氏は紫の上とともに住吉神社に詣でた。明石女御の産んだ若宮が帝位につく未来への御願果しのためである。明石一族に係る源氏の子孫の末長い繁栄が約束され、それを支える六条院の榮華もいつそう輝いたが、紫の上の心底に動く出家の志はおとろえることがなかった。「あまり年積りなば、その御心ばへも、つひに衰へなん。さらむ世を見果てぬさまに、心とそむきにしがな」(三一325)やがて朱雀院の五十賀を祝うため、六条院では華麗をきわめた女樂が盛大に行われた。物語は源氏の満ちたりた榮華を描きつくすべく、これに膨大な叙述を当てているが、そうした文脈の中で、花といえは桜にたとえられる紫の上の美しい容姿が強調され、彼女の理想的な女人像が印象深く映し出されている。宴を終えて源氏は紫の上と同衾し、愛を語らうが、そのとき再び、紫の上は出家の許可を求めている。

「まめやかに、いと、行くさき少なき心ちするを。今年も、かく、知らず顔にてすぐすは、いと、うしろめたくこそ。さき、くも聞ゆる事、いかで、御許しあらば」(三一358~359)彼女はいま37才

紫の上再論 — その「世(の中)」認識をめぐって —

である。源氏の言うとおり、「その方、人にすぐれたりける宿世」(同)は、「物はかなき身には、過ぎにたる、よその思え」(同)と自身も思うが、「心に堪へぬ物嘆かしさのみ、うち添ふや、さみづからのいのりなりける」(同)とも嘆かざるをえない。ここで、「心に堪へぬ物嘆かしさ」とは、具体的には女三宮の六条院への降嫁のことをさして言ったものであろう。

思うに、女三宮の降嫁は紫の上にとって、確かに深刻な衝撃を与えた。源氏がはじめて宮との結婚を告げたのは、年の暮れも近い、寒い冬の日で、「雪うち降り、空の気色もあはれに」(三一三)沈静した趣きを見せていた。源氏物語において、降りしきる雪の風景はそのまます中人物の思い悩む心象をあらわす場合が多いが、ここでも源氏と紫の上の苦悩に満ちた心の象徴として、雪の描写がおかれている。以来、孤閨を守る紫の上の衣の袖はいつも涙で濡れていた(三一五)。いま、いちいちの本文引用は省略するが、源氏の正妻の座から確実にすべり落ちていくわが身の不安を嘆き悲しむ紫の上の心情こそが、「若菜」兩巻の主題性を形成していく過程についてはすでに諸家がつとに論評してきたところなのである。そのことをじゅうぶん考慮に入れたうえで、私はなお紫の上の出家志願の動機について再考してみたい。

端的に、紫の上の出家志願の動機は何であったのか。女三宮の六条院への降嫁によってもたらされた苦悩と悲嘆は深刻ではあったが、紫の上はそのような自己の現実を直視し、強固な意志による自己抑制と賢明な理性・判断による対処によって、宮との対立や確執を避けたのである。破局への危機は避けられ、六条院の秩序と調和

と繁栄は維持され続けた。源氏の紫の上に対する愛情は、薄れるどころかますます深まっていった。宮のもとで過ごす夜でも、源氏の心は紫の上にあり、「一夜のほど、あしたの間も、恋しく、おぼつかなく、いとどしき御心のまさる」(三一五)のである。あくまでも平静を装い、賢明に情況に対応して身を処していく紫の上は、「あるべきかぎり、気高う、はづかしげに整ひたるさま」のかをりも、とり集め、めでたきさかりに、見え給ふ」(三一七)。源氏は「たぐひなくこそは」(同)と称賛を惜しまない。そのように満ち足りた愛情生活が続く中で、さきに引いた紫の上の出家志願のことが叙せられるのである。

いささか唐突にも思われる紫の上の出家志願の叙述を、われわれはいかなる文脈として把握すべきなのであろうか。

「この世は、かばかり」とか、「行くさき少なき心ちするを」とかの前おきのことばには、世の無常、人生のはかなさをはやくも悟りきったかのごとき厭世観、宗教的諦観が読みとられる。女三宮に対する嫉妬心や対抗意識ではなく、さきに触れた四年間をも含めた長い歲月の流れの中で抽象化され普通化され、あるいは昇華された諦念なのであろうか。ここで出家志願の動機を問題にすれば、そのような無常感そのものをとりあげなくてはなるまい。

すでに、重松信弘氏のご論考にもあるように、この時代の人々が出家に到る動機として、次のような五つの種類が考えられる。(一)甚だしく心を悩ますような事態に出合った場合。(二)無常の感慨や宿世の思いが心を誘う場合。(三)病氣を治し、息災延命を願う場合。(四)この世に希望を持たなくて、ひたすら後世を願う場合。(五)罪悪深重の

思い。氏も論及されているように、実際にはこれらのいくつかが重

なるケースが多いのであるが、紫の上の場合は上記のいずれに該当

するであろうか。紫の上は、後に発病していつそ出家の志を強く

し、「きこゆることを。さも心憂く」(三一三六)とか、「いかで、

なほ、本意あるさまになりて、しばしも、かづらはむ命の程は、

おこなひを、まきれなくて」(四一四三)とか言っているので、(三)や

何も含めて考えられるが、そもそも最初の出家志願が発病以前のこ

とであることを重視して、(二)を中心に考えるのが妥当であろう。女

三宮の降嫁が彼女を苦悩と悲嘆におとし入れたのだから(一)を重視す

べきだとする見解も一応はなりたつではあるが、私はいま紫の上

の心情描写の中に(一)をではなく、(二)を読みとるべきであることを強

調したのである。すなわち、宮の六条院降嫁のことを出家志願の

直接的動機とするには、紫の上はあまりにも長い歳月と変わらぬ源

氏の愛情とを彼女の日常として生きてしまったのではないだろう

か。いまはむしろ、そのような具体的直接的動機をもたない、もつ

と抽象的普遍的な無常感に追いたてられるような精神状況が彼女を

支配しているように、私には読みとられる。そして、このような抽

象思考、普遍認識は、第一部の紫の上についてはそれほど顕著で

はなかったのであり、こうした点でも第一部から第二部に至る紫の

上の人物像の変貌の問題が等閑視できないのである。

二

「若菜」上巻の始発に近い場面において、紫の上の次の詠歌が叙

目にちかくうつればかはる世(の)中を

ゆく末とほく頼みけるかな (三一二八)

女三宮の降嫁の直後、三日間夜離れなく宮のもとに通う源氏を送り

出すときの紫の上が胸中の苦悩と悲嘆の情を詠んだ、痛切な歌であ

る。源氏の愛をみすみ宮に奪われそうになつた紫の上の深い悲嘆

の情が、抑制されて慎ましかで静かな抒情として詠出されてお

り、源氏物語中の歌でも秀逸の傑作と評されよう。

すでに先学のご指摘にもあるように、この歌には二首の古歌が引

き歌として考えられる。古今集巻第十五恋歌五、紀有常の女「あま

雲のよそにも人のなりゆくか、さすがにめにはみゆる物から」ま

た、貫之集第九、近隣なりける所に方違にある女「秋萩の下葉に附

て目に近くよそなる人の心をぞ見る」いま、二首ともその詞書の引

用を省くが、歌意としてはいずれも男の心変わり、あるいは薄情を

嘆く女の気持を主題としている。

いま、これらの引き歌と紫の上の歌とをあわせ読むとき、引き歌

には男の移り気をなじるような、あらわな感情の表出が見られる

が、紫の上の歌には制御された、落ちついた抒情の調べが読みとら

れる。それは紫の上の人柄やこの場面での詠歌態度——彼女は古歌

の手習いをしながら、それとなく自分の歌を書きつけた——にもよ

るのであるが、より直接的には、引き歌には見られない「世(の)

中」という措辞の効果によるのである。この語が、そのすぐ上下

に配せられている「うつればかはる」や「ゆく末とほく」という表

現と密接に結びついて、単に相手の男の心変わりをなじるという意

味以上の無常の世、はかない人生を嘆く心情の表現となっている。

周知のとおり、平安朝語としての「世」あるいは「世の中」には、男女の仲、夫婦の關係の意と、世の中(世間)、人生の意との、両意が含まれている。さきの紫の上の歌の「世(の)中」が「いずれの意をあらわすものなのか、諸注を閲しても必ずしも一定してないが、私見では後者、すなわち広義の世の中、世間、人生を指したものと解したい。もちろん、かつて小野村洋子氏が説かれたように<sup>(46)</sup>、「この時代の貴族の女性の大部分にとって、『世の中』(世間)は即ち『世の中』(男女の仲)と重なるのが常態」であつたら、<sup>(47)</sup>「十歳で光源氏のもとにひきとられ、以後光源氏以外の男性と顔をあわせることもなく今日に至っている」紫の上にとつて、「源氏との間がらについての反省は、人生そのものについての省察という意味を重ねもつてくる」ことは確實である。ただ、氏もさらに論じておられるように、この歌では「光源氏との仲の無常なものであることを感知した」紫の上の内面において、それが「直ちに、『世の中』の無常として、普遍化されている」のである。

この歌に対する源氏の返歌「命こそたゆとも絶えめきだめなき世の常ならぬなかの契りを」(三一238)における「世」は、「さだめなき世」と「世の常ならぬ」の両方に関わつた表現であるが、それが紫の上の歌の「うつればかはる世(の)中」に導かれてきたものであることはいうまでもない。したがって、ここでは両者とも移ろいやすい人生、無常の世間を贈答歌で詠みあつたものと解するのが妥当であろう。

紫の上はこうして、「若菜」上巻の始発から、はやくも、人生無常の観を根底にすえた「世」認識をもっていたのである。さきに引

いた歌に近い条で、「世(の)中も、いと、常なき物を」(三一250)という叙述を見るが、ここでの「世(の)中」が源氏との夫婦仲の意ではなく、世間あるいは人生の意をさしていることは、「世(の)中も」とあることによつて、すでに明らかである。

もちろん、そのような紫の上の「世」認識が女三宮の降嫁によつて徐々に、また確實に地すべりしはじめている彼女自身の不安定な現実を知覚したことに觸発されたものであることは言うまでもない。しかし、現実における具体的な情況に対応する紫の上の認識として、それはあまりに抽象的観念的な様態を示すものであり、このような「世」認識は、いとも容易に彼女の出家志向へと飛躍するのである。

### 三

思うに、「若菜」上・下巻に登場する人物たちは、それぞれの情況や立場において、この世の無常、人生のはかなきを認識しながら生き、あるいは死に向つていく。ここで用いられる「世」あるいは「世の中」という語は、しばしば「常なし」「定めなし」などの形容語を伴つて叙せられている。

冒頭で出家の準備を急ぐ朱雀院の場合は言うまでもない。主人公の光源氏自身も、はやくから出家の志を抱き続けていたことを語る叙述が頻出する。「いと不定なる、世の定めなきなりや」(三一239)「故院におくれたてまつりし頃ほひより、世の、常なく思う給へられしかば」(三一234)「さも、移り行(く)世かな」(三一61)「さまくゝなる、世の定めなきを、心に思ひつめて」(三一400)――

無常感に染めあげられた源氏の「世」認識をよくあらわしている。源氏との十五年ぶりの逢瀬に愛欲をよみがえらせてしまう臘月夜は、「世(の)中を思ししづまり給ふ」(三一258)はずのいま、「さまざまに、世(の)中を思ひ知り」(三一282)、過去の復活を厭うべくやがて出家する。「常なき世とは、身一つのみ知り待りにしを」(三一401)とは、源氏にも劣らぬ無常の感慨をもったのであろうか。

明石の御方の場合、「世(の)中も定めなきに、やがて消え給ひなば、かひなくなん」(三一290)と父入道を慕い、わが娘女御には「世(の)中、定めがたければ、うしろめたさになん」(三一292)と、無常のこの世に処する道を説き聞かせる。

そのほか、「物のはえなきに、世(の)中はかなくおぼゆるを」(三一326)と言つてにわかに讓位する冷泉帝、「世の中の、常なきにより、(中略)年ふかき身の、冠を掛けむ、なにをか惜しからん」(同)と世を悲観して致仕する太政大臣、「世(の)中定めなきを」(三一303)中は、いと、常なき物を「(三一303、369)と口ばしりながら短い青春を情念の炎で焼きつくすかのごとくに死へ向う柏木などの、さまざまにはかなく、無常の「世」認識が見出される。これらの引用文中の「世」は、厳密に見れば狭義の「世」、すなわち男女の仲、夫婦の間がらの意に用いられたものも認められはしようが、ほとんどは広く世間あるいは人生一般をさしている。主要な人物たちは、それぞれに自己の過去を顧み、その生を深く省察し、己れの宿世や無常の世間を観じているかのごとくである。

「若菜」兩巻の主題と方法が、物語第一部で書かれた事件や人物  
紫の上再論 — その「世(の中)」認識をめぐる —

を再び呼び出してその「過去」としての意味を問い直し、把え直そうとするものであるとは、清水好子氏のご高論によって解き明かされているのであるが、それは、この巻の主要人物たちに前提的に賦与されている無常の「世」認識にもとづく主題と方法であったとも言えるであろう。この「世」を無常と観ずる人物たちの眼に、過去と現在と未来の意味が明瞭に見えてきたのである。紫の上も当然、そのような主題および方法の重要な担い手であった。

ただ、私にとつてとくに興味深いのは、前述した紫の上の「世」認識が「若菜」上巻のはじめから、ほとんど前提的自明的に彼女自身のものとして所有されている、唐突とも言えるその普遍志向のあり方である。それが単に紫の上一人の認識状態に限られるものではないことは、私のさきの粗述でも明らかであるが、出家志願という重大事さえもがそのように漠然とした無常の觀念に立脚していることを考慮して、この巻における作者の物語形象の達成法についてさらに考察を進めたい。

#### 四

いささか唐突な述べ方であるが、「若菜」下巻における紫の上の発病はなにに起因したのであろうか。

発病場面に至るまでの物語本文は、精確な情況設定と場面描写によつて、病に至る紫の上の生きさまと内面心理とを説得力のある確かな形象として読者に示している。女三宮降嫁以来、内界に苦惱と悲傷を刻みながらも、六条院の調和ある秩序と繁栄を維持して自らの苛酷な現実を生きぬき、心労積もっていたこと。いつその輝き

を増す彼女の美質を見て、「至らぬ事なく、すべて、何事につけても、もどかしく、たどろ／＼しきことまじらず、ありがたき、人の御有様」(三一—356)「とりあつめ足らひたる事は、まことに、類あらじ」(三一—357)とまで称賛する源氏にも、ふと「いと、かく具しぬる人は、世に久しからぬためしをあなるをと、ゆ／＼しきまで思ひ聞え給ふ」(三一—356)ことがあつたこと。地の文に「ことしは、三十七にぞなり給ふ」(同)とあつて、紫の上の重い厄年が強調されていること。女三宮の琴が上達したことを喜んで、それを口実に宮をたずねながら「御琴どもおしやりて、大殿籠りぬ」(三一—362)という描写で、源氏と宮との情交場面にリアリティをもたせていることなど。

右のごとき物語形象をたどれば、その直後に叙せられる彼女の発病も突然の印象をいささかも与えない。しかし、その時の紫の上の心理描写に注目すると、「あやし／＼、浮きても過でしつる有様かな。げに、のたまひつるやうに、人より異なる宿世も、ありける身ながら、人の、忍びがたく、飽かぬことにする物思ひ、離れぬ身にてや、やみなんとすらん。あぢきなくもあるかな」(三一—362)とあつて、彼女自身の生を過去から未来まで遠く、深く省察する思惟世界が鮮かに隈取られていることを知る。しかもそれは、「世のたとひに言ひ集めたる昔語りども」(同)に触発された思惟の世界なのである。紫の上の内界には、すでに明らかに見とおされた無常の「世の中」があるばかりで、源氏や女三宮、六条院で泣きみ笑ひみする多くの貴婦人の姿やふるまいや、その他もろもろのすべてが、遠ざかる小さな影にしか映らなかつたのではなからうか。発病した紫

の上はやがて、六条院を離れ二条院に移されるが、はかなく無常なこの「世」のどこに身を置いても、もはや彼女の病いを癒す場所はないであろう。病いの床で出家の許可を懇請し続けた紫の上は、やがてあたかも「消えゆく露」(四—182)のように、静かに息を引きとるのである。

ひるがえつて思うに、紫の上の発病は、確かに女三宮の降嫁によつてもたらされた深い苦悩と悲嘆に起因したのである。それは源氏に対する決定的な不信感を、彼女にもたらした。彼女の出家志願は源氏の色好みに対する挑戦であり、発病はそのたたかにおける彼女の敗北の肉体による証明でもあつたのであるが、物語の作者はそれらいつさいを、無常の「世」に生きる人間のはかない営みとして描くべく、とりわけ紫の上の生きざまの中に、その主題と方法を顕証しようとしたのではあるまいか。彼女の発病が著しく抽象的ともいえる無常の「世」認識に由因する、その描写のあり方にも、その一端がよく現われているのである。

なお、紫の上の病気が物の怪(六条御息所の死霊)の仕わざであるとする描写(三一—379)383)について付説しておきたい。私見によれば、それは紫の上の発病が源氏をめぐる女三宮との確執——心理的葛藤によるものでないことを読者に了解させるための、作者の周到な用意によるものである。作者は当初から、紫の上と宮の確執不和を注意深く避けてきている。宮の人物像を際だつて幼稚な人柄のものとして造型したのも、あるいは唐突とも読まれる宮と柏木との密通事件を物語中途に導入したのも、おそらくそうした作者の用意によるものであろう。主人公光源氏の理想の妻紫の上に、嫉妬

による乱心や発病はふさわしくない。が、無常感にまで昇華されている彼女の内面の苦悩や悲嘆が源氏の色好みに逡因するものであること問いつめる作者は、だれをも傷つけない方法でそれを果すために、過去の怨霊を呼び出したのである。紫の上の理想的人物像は、あくまでも守り続けられなければならない。作者自身の人生観・世界観をもつともよく担いえた人物としても、なのである。

## 五

紫の上が、六条院における現実状況を強靱な意志と聡明な理性とで十全に生きぬきながら、内面において世のいっさいを無常と観ずる認識をますます深くしていく自己矛盾——より端的な表現をとれば、現実と理想との対立相剋、外界と内界の分裂背反、肉体と精神の乖離の様相は、たとえば紫式部日記あるいは紫式部集などに見られる作者自身の精神構造、その様態ときわめて近似したものと見とれよう。

紫式部日記の記述が、後一条帝の誕生を祝つてにぎわい栄える土御門邸で自分もまたその祝儀に参列する一人として振まつていることを叙しながら、いかにも唐突に、「なぞや、まして、思ふことの少しもなのめなる身なろましかば、すきすきしくもてなし若やぎて、常なき世をもすぐしてまし、めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのみまざるぞ、いと苦しき」(30)という、深い無常感に沈みゆく式部の心情告白を叙し、さらにそうした心情が仏教的な非意識にまで昇華されていることをも叙

紫の上再論 — その「世(の中)」認識をめぐって —

していることは、式部の精神構造を見るうえでしばしば問題視されてきた。「世のいとはしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて待れば、聖にならむに、懈怠すべうも待らず。ただひたみちにそむきても、雲に乗らぬほどのためたふべきやうなむ待るべかなる。それに、やすらひ侍るなり」(80)と、厭離穢土の気持を強く抱きながらなかなか決断がつかない自分を嘆く叙述も見られる。このような無常感に彩られた式部の内面告白が、ほとんど公的記録にも近い様態を示す日記の叙述文中に挿入される、その不整合な文体そのものが式部の生きざまを象徴するものと私は考えているが、「若菜」上・下巻における紫の上造型が、まさにそうした式部自身の虚構世界における自己確認を意味するものではないだろうか。

紫式部集にある歌についても、同じことが言えるようである。すでに清水好子氏のご論考にもあるように、はやくから未亡人になつた紫式部を覆う感情は、「世を憂し」という一語に尽くされるのであり、彼女の華やかなるべき宮廷生活においても、この一語を源泉とする数多くの詠歌が成つていったのである。その無常感が夫宜孝の早世に起因するものであろうことは疑えないとして、そうした具體的な体験に基く感情をいち早く抽象化、普遍化して一種の観念とし、長い時間の中で持続的にそれを吟味し検証しようとする精神のあり様に、私は式部の独特の人格と資質を見たい。そして、さらに私見を許していただけるなら、源氏物語第一部において源氏の正妻としての位置が確定された紫の上の人間像に、そうした式部自身の内面世界を投入することによって、理想像としての自己の分身を描き出そうとしたのではないだろうか。源氏物語第二部はそのような

式部の精神構造のあらわれとして虚構化されているのであり、紫の上の「世」認識にもっとも端的にそれが集中していると考えたい。

清水氏も説かれるように、「人間の有限を自覚し、仏道を志し、死後の、見えざる生について思い悩むのが、知識人のスタイルとされていた時代である。だから、紫式部などは逆に、いたずらに仏門に入りたいなどと口にするのは気障だという自覚があったぐらいた。

(中略)主人も召使いも、ともに現世の無常を嘆きながら、それでも召使いは主家の繁栄に希望を見出すと書いてあるほうが、まことの礼讃になった」という紫式部日記、あるいは紫式部集の世界は、そのまま源氏物語「若菜」両巻における紫の上の世界と重なるのではなからうか。

式部が夫に死別した頃の詠歌と思われるものに、「消えぬ間の身をも知る／＼朝顔の露とあらそふ世を嘆くかな」あるいは「若竹のおいゆく末を祈るかな この世を憂しと厭ふものから」などがあり、ここで「世を憂し」と嘆く心情はそのまま彼女の出仕の時期に及び、「初めて内裏わたりを見るにも、もあはれなれば身の憂さは心のうちに慕ひ来て いま九重ぞ思ひ乱るる」との詠歌をなし、以降同じ趣きの数多くの詠歌で一貫するものとなっている。

源氏物語の執筆の時期を正確に証することはできないが、少くとも、紫式部日記の記述にあらわれる「源氏の物語」は、その前後の叙述ともあわせ考えて、「薄雲」巻以降の相当の巻までを指しているらしいことが、すでに諸先学によって明らかになっている。さらに私見によれば、ちょうど寛弘五、六年の時期が「若菜」上・下巻の執筆時期とほとんど重なっていたのではないかと推測したい。

「内心の不断の不安と不満と、毎日の謙抑の生活」(清水氏)の中にあつた当時の式部がこの両巻における紫の上像に近接したものであることは既に述べたが、満ち足りた生活の中でほとんど唐突に世の無常を嘆く紫の上の抽象思考、普遍認識のスタイルが第一部における彼女の人物像と著しく相異したものであることに留意して、私は物語作者がにわかに関心した自己自身の内面思惟を作中人物に移入しはじめた様相を読みとりたい。すなわち、紫の上が直面した現実情況からいち早く世の無常を観じて出家を志向する過程について、作者がじゅうぶん確かな形象を獲得しないままやや性急に人物像を變貌させなければならなかつた要因の一つとして、私は「若菜」巻執筆の時期を紫式部日記執筆の時期と重ねてみることもできると思ふのである。もちろん、式部の日記自体は回想記述体をとつてゐることから、寛弘七年四月を下る時期の成立と見なくてはなるまいことも確かなことである。この日記の成立論議に立ち入ることはいま私の力量を超えるので別の機会に試みることにしても、その記述内容の精密さ、正確さを思えば、現存形態の日記のもとなる手びかえ的な草稿がはやく成されていたと考へるのは自然であり、それは寛弘五、六年頃から日付を追う形でさまざまの行事や生活の記録として記され、その中に日々の自己の感慨や思索をも併記していたものと見ることが出来る。いずれにしても、「若菜」両巻の物語は、その主題・構想・叙述のすべてにわたつて、その素地が紫式部日記の記述中に見出されるように思ふのは、私の偏見によるのであろうか。それらの執筆時期を重ねるのは単なる私の憶測に過ぎないのだが、少くとも、「若菜」両巻における紫の上の内面世界が紫式部日記に



叙せられている作者自身のそれにきわめて近接したものであり、ほとんど具体的契機をもたない無常の「世」認識によって満たされたものであったことだけは指摘できそうである。

かくて、紫の上は作者紫式部のもっとも重要な自画像たりえたのである。

注1 大朝雄二氏「源氏物語の方法についての試論」(「国語国文学研究」47) 昭46・9、「源氏物語正篇の研究」所収)や野村精一氏「若菜下」(「国文学」昭41・6、「源氏物語の創造」所収)ほか参照。

注2 秋山虔氏「『若菜』巻の始発をめぐって」(「源氏物語の世界」昭39・12)ほか参照。

注3 重松信弘氏「源氏物語の仏教思想」(昭42・8) 390ページ。

注4 拙稿「紫の上の人間像について」第一部から第二部への変貌をめぐって」(「日本文学研究」第十四号)で触れた。

注5 日本古典文学全集「源氏物語四」(小学館刊)には拾遺集に収められている貫之に贈る女の歌一首のみを引くが、日本古典文学大系「源氏物語三」の補注には二首を引いている。

注6 日本古典全書(池田亀鑑氏)は夫婦の仲の意とし、日本古典文学大系(山岸徳平氏)は世の中(世間)の意とし、日本古典文学全集(阿部秋生・秋山虔・今井源衛諸氏)は前者の意として注解している。吉沢義則氏、玉上琢弥氏ほか

紫の上再論 ―その「世の中」認識をめぐって―

多くが夫婦仲の意に解されているが、谷崎潤一郎氏口訳では「世の中」となっていて、必ずしも一定していない。

注7 小野村洋子氏「源氏物語の精神的基底」(昭45・4) 230〜231ページ。

注8 柏木の会話文中の「世の中」は、源氏と紫の上の夫婦の仲を指したものであろうが、ここでもそれに限定しないで広く男女の仲の意が含まれ、それはさらに一般的な世の中、すなわち世間の意にも転化されていく可能性をもつ。

注9 清水好子氏「源氏物語の主題と方法——若菜上・下巻について——」(「古代文学論叢」第一輯) 昭44・6)

注10 清水好子氏「紫式部」(岩波新書、昭48・4)

注11 注10の書146〜147ページ。

なお、本文の引用は日本古典文学大系本「源氏物語」(岩波書店刊)、岩波文庫本「紫式部日記」「紫式部集」によった。( )内それぞれページ数を記した。

(昭和54年10月)